



1. 次の にあてはまる適切な数値を解答欄に記入せよ.

- (1) 1の数字が書かれたカードが1枚, 2の数字が書かれたカードが2枚, 3の数字が書かれたカードが3枚, 4の数字が書かれたカードが4枚の合計10枚のカードがある. カードをよく混ぜて, 1枚ずつ3枚のカードを取り出し, 取り出した順に左から並べて3桁の整数 N をつくる. このとき, N が3の倍数である確率は (ア), 6の倍数である確率は (イ) である.

(1) 1が1枚, 2が2枚, 3が3枚, 4が4枚の計10枚から3枚を引いて並べるので, 全事象の場合の数は,

$${}_{10}P_3 = 10 \cdot 9 \cdot 8 \text{ (通り)}$$

このうち, N が3の倍数となる組み合わせを考えると,

(ア) 1, 4の5枚の中から3枚をとって並べる.

(イ) 3の3枚の中から3枚をとって並べる.

(ウ) 1, 4の中から1枚, 2の中から1枚, 3の中から1枚をとって並べる.

したがって, それぞれの場合の数を考えると,

$$(ア) {}_5P_3 = 5 \cdot 4 \cdot 3 \text{ (通り)}$$

$$(イ) {}_3P_3 = 3 \cdot 2 \cdot 1 \text{ (通り)}$$

$$(ウ) {}_5C_1 \cdot {}_2C_1 \cdot {}_3C_1 \cdot 3! = 5 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 3 \cdot 2 \cdot 1 \text{ (通り)}$$

である. したがって,

$$\frac{60 + 6 + 180}{10 \cdot 9 \cdot 8} = \frac{41}{120} \quad \dots \text{答}$$

また, N が6の倍数となるのは, 上記の場合のうち, 一の位の数字が偶数となる確率を求めればよい.

(ア)のうち, 一の位の数が偶数となるのは, 一の位に4が入り, 百・十の位には1,

4のいずれでもよいので,

$${}_4C_1 \cdot {}_4P_2 = 48 \text{ (通り)}$$

(イ)のうち, 一の位の数が偶数となる並べ方は存在しない.

(ウ)のうち, 一の位の数が偶数となるのは, 以下の2つの場合がある.

2が一の位にあるとき, 百・十の位は, 1, 4の中から1枚, 3の中から1枚をとって並べるので,

$${}_2C_1 \cdot {}_5C_1 \cdot {}_3C_1 \cdot 2! = 60 \text{ (通り)}$$

4が一の位にあるとき, 百・十の位は, 2の中から1枚, 3の中から1枚をとって並べるので,

$${}_4C_1 \cdot {}_2C_1 \cdot {}_3C_1 \cdot 2! = 48 \text{ (通り)}$$

したがって,

$$\frac{48 + 60 + 48}{10 \cdot 9 \cdot 8} = \frac{13}{60} \quad \dots \text{答}$$

(2) 実数 x, y が $|2x+y|+|2x-y|=4$ をみたすとき, $2x^2+xy-y^2$ のとり得る値の範囲は (ウ) $\leq 2x^2+xy-y^2 \leq$ (エ) である.

(2) $2x+y=X, 2x-y=Y$ とおくと, $x=\frac{X+Y}{4}, y=\frac{X-Y}{2}$ である. このとき (X, Y) は等式 $|X|+|Y|=4$ …① を満たす.

$$I = 2x^2 + xy - y^2 = 2\left(\frac{X+Y}{4}\right)^2 + \frac{X+Y}{4} \cdot \frac{X-Y}{2} - \left(\frac{X-Y}{2}\right)^2 \\ = \frac{3XY - Y^2}{4}$$

(ア) $X \geq 0, Y \geq 0$ のとき

①より, $X=4-Y, 0 \leq Y \leq 4$ であるから,

$$I = \frac{3}{4}(4-Y)Y - \frac{1}{4}Y^2 = -Y^2 + 3Y = -\left(Y - \frac{3}{2}\right)^2 + \frac{9}{4}$$

したがって, 最大値は $Y = \frac{3}{2}$ のとき $\frac{9}{4}$, 最小値は $Y = 4$ のとき 0 .

(イ) $X \geq 0, Y \leq 0$ のとき

①より, $X=4+Y, -4 \leq Y \leq 0$ であるから,

$$I = \frac{3}{4}(4+Y)Y - \frac{1}{4}Y^2 = \frac{1}{2}Y^2 + 3Y = \frac{1}{2}(Y+3)^2 - \frac{9}{2}$$

したがって, 最大値は $Y=0$ のとき 0 , 最小値は $Y=-3$ のとき $-\frac{9}{2}$.

(ウ) $X \leq 0, Y \geq 0$ のとき

①より, $X=Y-4, 0 \leq Y \leq 4$ であるから,

$$I = \frac{3}{4}(Y-4)Y - \frac{1}{4}Y^2 = \frac{1}{2}Y^2 - 3Y = \frac{1}{2}(Y-3)^2 - \frac{9}{2}$$

したがって, 最大値は $Y=0$ のとき 0 , 最小値は $Y=3$ のとき $-\frac{9}{2}$.

(エ) $X \leq 0, Y \leq 0$ のとき

①より, $X=-4-Y, -4 \leq Y \leq 0$ であるから,

$$I = \frac{3}{4}(-4-Y)Y - \frac{1}{4}Y^2 = -Y^2 - 3Y = -\left(Y + \frac{3}{2}\right)^2 + \frac{9}{4}$$

したがって, 最大値は $Y = -\frac{3}{2}$ のとき $\frac{9}{4}$, 最小値は $Y = 4$ のとき 0 .

(ア)~(エ)より,

$$-\frac{9}{2} \leq 2x^2 + xy - y^2 \leq \frac{9}{4} \quad \dots \text{答}$$

別解 置換せず, 対称性を用いると計算が楽.

$|2x+y|+|2x-y|=4$ …① とする.

(i) $2x+y \geq 0, 2x-y \geq 0$ のとき,

$$\textcircled{1} \iff (2x+y) + (2x-y) = 4 \iff x = 1$$

(ii) $2x+y \geq 0, 2x-y \leq 0$ のとき,

$$\textcircled{1} \iff (2x+y) - (2x-y) = 4 \iff y = 2$$

(iii) $2x+y \leq 0, 2x-y \geq 0$ のとき,

$$\textcircled{1} \iff -(2x+y) + (2x-y) = 4 \iff y = -2$$

(iv) $2x+y \leq 0, 2x-y \leq 0$ のとき,

$$\textcircled{1} \iff -(2x+y) - (2x-y) = 4 \iff x = -1$$

したがって, $A(1, 2), B(-1, 2), C(-1, -2), D(1, -2)$ とすると,

①の表す図形は長方形 ABCD の周である.

さらに, $f(x, y) = 2x^2 + xy - y^2$ とおく.

このとき, $f(-x, -y) = f(x, y)$ であるから, 原点 O に関して対称な2点において $f(x, y)$ は同一の値をとる.

したがって, 長方形 ABCD の周のうち, 線分 AB, AD 上のみを考えれば十分である.

(ア) 線分 AB ($y=2, -1 \leq x \leq 1$) において,

$$f(x, y) = f(x, 2) = 2x^2 + 2x - 4 = 2\left(x + \frac{1}{2}\right)^2 - \frac{9}{2}$$

$$\text{であるから, } -1 \leq x \leq 1 \text{ のとき, } f\left(-\frac{1}{2}, 2\right) \leq f(x, y) \leq f(1, 2) \iff -\frac{9}{2} \leq f(x, y) \leq 0 \quad \dots \text{答}$$

(イ) 線分 AD ($x=1, -2 \leq y \leq 2$) において,

$$f(x, y) = f(1, y) = -y^2 + y + 2 = -\left(y - \frac{1}{2}\right)^2 + \frac{9}{4}$$

$$\text{であるから, } -2 \leq y \leq 2 \text{ のとき, } f(1, -2) \leq f(x, y) \leq f\left(1, \frac{1}{2}\right) \iff -4 \leq f(x, y) \leq \frac{9}{4} \quad \dots \text{答}$$

②, ③の和集合をとって,

$$-\frac{9}{2} \leq 2x^2 + xy - y^2 \leq \frac{9}{4} \quad \dots \text{答}$$



2. n は自然数とし、微分可能な関数 $f_n(x)$ は等式 $f_n(x) = e^{-x}x^{n+1} + \int_0^x e^{-t}f_n(x-t)dt$ をみたすとする。このとき、次の問いに答えよ。ただし、 e は自然対数の底である。

- (1) $\frac{d}{dx}f_n(x)$ を求めよ。
- (2) m は2以上の自然数とする。 $x > 0$ のとき、不等式 $e^{-x}x^m \leq e^{-m}m^m$ が成り立つことを示せ。
- (3) 極限值 $\lim_{x \rightarrow \infty} f_n(x)$ を求めよ。

(1) $f_n(x) = e^{-x}x^{n+1} + \int_0^x e^{-t}f_n(x-t)dt$...① の定積分において、 $s = x-t$ と置換すると、

$$\begin{aligned} f_n(x) &= e^{-x}x^{n+1} + \int_x^0 e^{-(x-s)}f_n(s) \cdot (-ds) \\ &= e^{-x}x^{n+1} + e^{-x} \int_0^x e^s f_n(s) ds \end{aligned}$$

したがって、

$$e^x f_n(x) = x^{n+1} + \int_0^x e^s f_n(s) ds$$

両辺を x で微分すると、

$$e^x f_n(x) + e^x \cdot \frac{d}{dx} f_n(x) = (n+1)x^n + e^x f_n(x)$$

$$\iff \frac{d}{dx} f_n(x) = (n+1)e^{-x}x^n \quad \dots \text{㉞}$$

(2) $g(x) = e^{-x}x^m$ ($x > 0$) とおくと、

$$\begin{aligned} g'(x) &= -e^{-x}x^m + m e^{-x}x^{m-1} \\ &= e^{-x}x^{m-1}(m-x) \end{aligned}$$

増減表は右のようになるから、

$$g(x) \leq g(m) \iff e^{-x}x^m \leq e^{-m}m^m$$

が成り立つ。...㉞

x	(0)	...	m	...
$g'(x)$		+	0	-
$g(x)$		↗		↘

(3) (1)の結果から、定数 a を用いて、

$$f_n(x) = (n+1) \int_a^x e^{-t} t^n dt$$

と表すことができる。

さらに、①より $f_n(0) = 0$ であるから、 $a = 0$ とすればよく、

$$f_n(x) = (n+1) \int_0^x e^{-t} t^n dt \quad \dots \text{㉞}$$

が成り立つ。

一方、積の微分から、自然数 k に対して、

$$(e^{-t}t^k)' = -e^{-t}t^k + k e^{-t}t^{k-1}$$

区間 $0 \leq t \leq x$ において両辺を積分すると、

$$\left[e^{-t}t^k \right]_0^x = - \int_0^x e^{-t}t^k dt + k \int_0^x e^{-t}t^{k-1} dt$$

$$\iff e^{-x}x^k = - \frac{f_k(x)}{k+1} + f_{k-1}(x)$$

両辺を $k!$ で割ると、

$$\frac{e^{-x}x^k}{k!} = - \frac{f_k(x)}{(k+1)!} + \frac{f_{k-1}(x)}{k!}$$

②を $n=0$ においても定義できると考えると、

$$\sum_{k=1}^n \frac{e^{-x}x^k}{k!} = \sum_{k=1}^n \left\{ - \frac{f_k(x)}{(k+1)!} + \frac{f_{k-1}(x)}{k!} \right\} = - \frac{f_n(x)}{(n+1)!} + \frac{f_0(x)}{1!} \quad (n \geq 1)$$

この式において、

$$f_0(x) = \int_0^x e^{-t} dt = \left[-e^{-t} \right]_0^x = 1 - e^{-x}$$

であるから、

$$\sum_{k=1}^n \frac{e^{-x}x^k}{k!} = - \frac{f_n(x)}{(n+1)!} + 1 - e^{-x}$$

$$\iff f_n(x) = (n+1)! \left(1 - e^{-x} - \sum_{k=1}^n \frac{e^{-x}x^k}{k!} \right) \quad \dots \text{㉞}$$

そこで、 $\lim_{x \rightarrow \infty} e^{-x}x^k$ ($k \geq 1$) を求める。

(2)において、 $m = k+1$ (≥ 2) とおくと、

$$e^{-x}x^{k+1} \leq e^{-k-1}(k+1)^{k+1}$$

$x > 0$ より、

$$0 < e^{-x}x^k \leq \frac{e^{-k-1}(k+1)^{k+1}}{x}$$

$\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{e^{-k-1}(k+1)^{k+1}}{x} = 0$ であるから、はさみうちの原理を用いて、

$$\lim_{x \rightarrow \infty} e^{-x}x^k = 0$$

この結果を ③ に適用して、

$$\begin{aligned} \lim_{x \rightarrow \infty} f_n(x) &= \lim_{x \rightarrow \infty} (n+1)! \left(1 - e^{-x} - \sum_{k=1}^n \frac{e^{-x}x^k}{k!} \right) = (n+1)! \left(1 - 0 - \sum_{k=1}^n 0 \right) \\ &= (n+1)! \quad \dots \text{㉞} \end{aligned}$$



3. 自然数 n に対して、整式 $f_n(x)$ を次のように定める.

$$f_1(x) = x^2 + x - \frac{1}{4}$$

$$f_n(x) = f_1(f_{n-1}(x)) \quad (n \geq 2)$$

$f_n(x)$ を x^2 で割ったときの余りを $a_n x + b_n$ とするとき、次の問いに答えよ.

(1) a_2, b_2 の値を求めよ.

(2) 極限值 $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n$ を求めよ.

$$f_1(x) = x^2 + x - \frac{1}{4} \text{ より, } a_1 = 1, b_1 = -\frac{1}{4} \quad \dots \textcircled{1}$$

また、題意より $f_n(0) = b_n, f_n'(0) = a_n$ である.

$$f_n(x) = f_1(f_{n-1}(x)) = \{f_{n-1}(x)\}^2 + f_{n-1}(x) - \frac{1}{4} \quad \dots \textcircled{2} \text{ において } x=0 \text{ とすると,}$$

$$f_n(0) = \{f_{n-1}(0)\}^2 + f_{n-1}(0) - \frac{1}{4} \iff b_n = b_{n-1}^2 + b_{n-1} - \frac{1}{4} \quad \dots \textcircled{3}$$

また、②の両辺を x で微分すると、

$$f_n'(x) = \{2f_{n-1}(x) + 1\} f_{n-1}'(x)$$

$x=0$ として、

$$f_n'(0) = \{2f_{n-1}(0) + 1\} f_{n-1}'(0) \iff a_n = (2b_{n-1} + 1)a_{n-1} \quad \dots \textcircled{4}$$

(1) ①, ③, ④ より、

$$a_2 = (2b_1 + 1)a_1 = \frac{1}{2}, \quad b_2 = b_1^2 + b_1 - \frac{1}{4} = -\frac{7}{16} \quad \dots \textcircled{\text{答}}$$

(2) ④を繰り返し用いて、

$$\begin{aligned} a_n &= (2b_{n-1} + 1)(2b_{n-2} + 1) \cdots (2b_2 + 1)(2b_1 + 1)a_1 \\ &= 2^{n-1} \left(b_{n-1} + \frac{1}{2}\right) \left(b_{n-2} + \frac{1}{2}\right) \cdots \left(b_2 + \frac{1}{2}\right) \left(b_1 + \frac{1}{2}\right) \quad \dots \textcircled{5} \end{aligned}$$

また、③の両辺に $\frac{1}{2}$ を加えて、

$$b_n + \frac{1}{2} = \left(b_{n-1} + \frac{1}{2}\right)^2$$

$b_n + \frac{1}{2}$ は常に正であるから、両辺の対数をとると、

$$\log_2 \left(b_n + \frac{1}{2}\right) = 2 \log_2 \left(b_{n-1} + \frac{1}{2}\right)$$

したがって、

$$\log_2 \left(b_n + \frac{1}{2}\right) = 2^{n-1} \log_2 \left(b_1 + \frac{1}{2}\right) = 2^{n-1} \log_2 \left(\frac{1}{4}\right) = 2^{n-1} \cdot (-2) = -2^n$$

これより、 $b_n + \frac{1}{2} = 2^{-2^n}$ であるから、⑤を用いて、

$$a_n = 2^{n-1} \cdot 2^{-2^{n-1}} \cdot 2^{-2^{n-2}} \cdots 2^{-2^2} \cdot 2^{-2^1} = 2^{c_n}$$

となる。ただし、

$$\begin{aligned} c_n &= n-1 - (2^{n-1} + 2^{n-2} + \cdots + 2^2 + 2^1) = n-1 - \frac{2(2^{n-1}-1)}{2-1} \\ &= n+1-2^n \end{aligned}$$

$n \geq 2$ のとき、

$$c_n = n+1 - (1+1)^n \leq n+1 - ({}_n C_0 + {}_n C_1 + {}_n C_2) = -\frac{n(n-1)}{2}$$

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \left\{ -\frac{n(n-1)}{2} \right\} = -\infty \text{ より } \lim_{n \rightarrow \infty} c_n = -\infty \text{ であるから,}$$

$$\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \lim_{n \rightarrow \infty} 2^{c_n} = 0 \quad \dots \textcircled{\text{答}}$$

別解 商を設定して解く.

(1) $f_1(x) = x^2 + x - \frac{1}{4}$ であるから、 $a_1 = 1, b_1 = -\frac{1}{4}$ である。また、 x の整式 $g_n(x)$ を

用いて、 $f_n(x) = x^2 g_n(x) + a_n x + b_n$ とおく。

$$f_{n+1}(x) = \{f_n(x)\}^2 + f_n(x) - \frac{1}{4}$$

$$= \{x^2 g_n(x) + a_n x + b_n\}^2 + x^2 g_n(x) + a_n x + b_n - \frac{1}{4}$$

ここで、 x の係数と定数項を取り出すことにより、

$$a_{n+1} = 2a_n b_n + a_n \quad \dots \textcircled{1}$$

$$b_{n+1} = b_n^2 + b_n - \frac{1}{4} \quad \dots \textcircled{2}$$

これを用いると、

$$a_2 = \frac{1}{2}, b_2 = -\frac{7}{16} \quad \dots \textcircled{\text{答}}$$

である。



4. O を原点とする座標空間内に、定点 A (4, 0, 0) と 3 点 P (4cosθ, 2√2 sinθ, 2√2 sinθ), Q (4cosθ, $\frac{\sqrt{2}}{2}$ sinθ, $\frac{\sqrt{2}}{2}$ sinθ), R があり、 $0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ かつ $\overrightarrow{OR} = 4 \frac{\overrightarrow{OQ}}{|\overrightarrow{OQ}|}$ をみたしている。このとき、次の問いに答えよ。

(1) θ が $0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ の範囲を動くとき、 $|\overrightarrow{PR}|$ の最大値と、そのときの cosθ の値を求めよ。

(2) $|\overrightarrow{PR}|$ が最大となるときを考える。O を端点とし線分 PR の中点を通る半直線上に、点 M を $|\overrightarrow{OM}| = 4$ となるようにとるとき、△MOA の面積を求めよ。

(1) $|\overrightarrow{OP}| = \sqrt{(4\cos\theta)^2 + (2\sqrt{2}\sin\theta)^2 + (2\sqrt{2}\sin\theta)^2} = 4$
 $|\overrightarrow{OR}| = 4$
 である。
 $|\overrightarrow{PR}|^2 = |\overrightarrow{OR} - \overrightarrow{OP}|^2 = |\overrightarrow{OR}|^2 - 2\overrightarrow{OP} \cdot \overrightarrow{OR} + |\overrightarrow{OP}|^2 = 32 - 2\overrightarrow{OP} \cdot \overrightarrow{OR}$
 ここで、
 $\overrightarrow{OP} \cdot \overrightarrow{OQ} = \begin{pmatrix} 4\cos\theta \\ 2\sqrt{2}\sin\theta \\ 2\sqrt{2}\sin\theta \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} \frac{\sqrt{2}}{2}\sin\theta \\ \frac{\sqrt{2}}{2}\sin\theta \\ \frac{\sqrt{2}}{2}\sin\theta \end{pmatrix} = 16\cos^2\theta + 4\sin^2\theta = 4(3\cos^2\theta + 1)$
 また、
 $|\overrightarrow{OQ}| = \sqrt{(4\cos\theta)^2 + \left(\frac{\sqrt{2}}{2}\sin\theta\right)^2 + \left(\frac{\sqrt{2}}{2}\sin\theta\right)^2} = \sqrt{15\cos^2\theta + 1}$
 であるから、
 $|\overrightarrow{PR}|^2 = 32 - \frac{32(3\cos^2\theta + 1)}{\sqrt{15\cos^2\theta + 1}} = 32 \left(1 - \frac{3\cos^2\theta + 1}{\sqrt{15\cos^2\theta + 1}}\right)$
 ここで、 $\sqrt{15\cos^2\theta + 1} = X$ とおくと、 $1 \leq X \leq 4$ であり、
 $|\overrightarrow{PR}|^2 = 32 \left(1 - \frac{1}{5} \left(X + \frac{4}{X}\right)\right)$
 ここで、 $X > 0, \frac{4}{X} > 0$ であるから、相加平均・相乗平均の関係より、
 $X + \frac{4}{X} \geq 2\sqrt{X \cdot \frac{4}{X}} = 4$ (等号成立は $X = 2$)
 すなわち、
 $|\overrightarrow{PR}|^2 \leq 32 \left(1 - \frac{1}{5} \cdot 4\right) = \frac{32}{5}$
 となるので、 $|\overrightarrow{PR}|$ の最大値は $\frac{4\sqrt{10}}{5}$ である。 … 圏
 また、等号成立は $X = 2$ のときであるから、

$$15\cos^2\theta + 1 = 4 \iff \cos^2\theta = \frac{1}{5}$$

$0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ であるから、 $\cos\theta = \frac{1}{\sqrt{5}}$ 。 … 圏

(2) (1) のとき、 $(\cos\theta, \sin\theta) = \left(\frac{1}{\sqrt{5}}, \frac{2}{\sqrt{5}}\right)$ ($\because 0 < \theta < \frac{\pi}{2}$) である。したがって、
 $P\left(\frac{4}{\sqrt{5}}, \frac{4\sqrt{2}}{\sqrt{5}}, \frac{4\sqrt{2}}{\sqrt{5}}\right)$, $Q\left(\frac{4}{\sqrt{5}}, \frac{\sqrt{2}}{\sqrt{5}}, \frac{\sqrt{2}}{\sqrt{5}}\right)$, $R\left(\frac{8}{\sqrt{5}}, \frac{2\sqrt{2}}{\sqrt{5}}, \frac{2\sqrt{2}}{\sqrt{5}}\right)$ となるので、線分 PR の中点を N とすると、

$$\overrightarrow{ON} = \frac{3\sqrt{2}}{\sqrt{5}} \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$$
 ここで、点 M は半直線 ON 上にあることから、∠AOM は \overrightarrow{OA} と \overrightarrow{ON} のなす角である。つまり、2つのベクトル

$$\vec{v}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \vec{v}_2 = \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$$
 のなす角なので内積を利用して、

$$\cos \angle AOM = \frac{\vec{v}_1 \cdot \vec{v}_2}{|\vec{v}_1| |\vec{v}_2|} = \frac{1}{\sqrt{2}}$$
 ゆえに △MOA の面積は $\frac{1}{2} \cdot 4 \cdot 4 \cdot \frac{1}{\sqrt{2}} = 4\sqrt{2}$ … 圏

別解 すべての点が平面 $y = z$ 上の点を利用しての点を考え、回転移動する。
 与えられた点 O, A, P, Q, R, M を x 軸正方向から見て、x 軸を中心に $-\frac{\pi}{4}$ 回転すると、どの点も xy 平面上に移る (点 O, A の位置は変わらない)。点 P, Q, R, M の移動後の点を P', Q', R', M' とする。このとき、
 $P'(4\cos\theta, 4\sin\theta)$, $Q'(4\cos\theta, \sin\theta)$
 であり、(1) より $\cos\theta = \frac{1}{\sqrt{5}}$, $\sin\theta = \frac{2}{\sqrt{5}}$ であるから、
 $P'\left(\frac{4}{\sqrt{5}}, \frac{8}{\sqrt{5}}\right)$, $Q'\left(\frac{4}{\sqrt{5}}, \frac{2}{\sqrt{5}}\right)$
 したがって、点 O, P' を通る直線の方程式は $y = 2x$, 点 O, Q', R' を通る直線の方程式は $y = \frac{1}{2}x$ である。
 この 2 直線は $y = x$ に関して対称であり、また $OP' = OR' (= 4)$ であるから、半直線 OM' を表す式は $y = x (x \geq 0)$ である。
 さらに、 $|\overrightarrow{OM}| = 4$ であるから、 $M'(2\sqrt{2}, 2\sqrt{2})$
 したがって、

$$\triangle MOA = \triangle M'OA = \frac{1}{2} \cdot 4 \cdot 2\sqrt{2} = 4\sqrt{2} \quad \dots \text{圏}$$

- 【講評】**
- やや煩雑だが、確実に正解を取るべき問題。方針は見えても、うまく処理しないと手間と時間が掛かり、難しい問題。
 - 慈恵レベルならば、典型問題で、確実に取るべき問題だが、ここを取れるかどうかポイントかもしれない。糸口を見つけることが困難であり、できなくても問題ないだろう。
 - 基本問題であり、絶対に落とせない。漸化式を作ることがポイントだが、そこまで来ても、その処理が困難であり、時間内にやりきることは困難だろう。
 - 全体の中で一番優しい問題である。計算量を考えると決して簡単ではないが、合格を勝ち取るには落とせない。

全体として、完答が難しい仕様になっている。時間配分や計算の手際を誤ると半分も取れないかもしれない。真面目に全てを解こうとせず、簡単な問題を見つけて如何に正確に解けるかがポイントとなる。55% で十分勝負になると考えられる。また、2016, 2017 入試と続いて出題された整数問題が今年には出題されなかった。